

# 運動場面における「苦手さ」の因子構造に関する検討

菊池航生（筑波大学大学院）

## 1. 目的

本研究は、運動場面における「苦手さ」に共通する潜在的な因子を見つけ出し、「苦手さ」の因子構造を明確にすることを目的とした。

## 2. 研究方法

対象者は、関東地方にあるA県の国立大学附属高等学校生徒666名から記入漏れなどを除いた有効回答526名(79.0%)であった。調査方法はアンケートを用いた質問紙調査で、調査期間は2018年6月下旬から7月上旬の約1ヵ月間であった。分析方法は、因子分析と重回帰分析を行った。

## 3. 結果と考察

### 1) 4つの因子から構成される「苦手さ」

因子分析の結果、4つの因子を抽出した。第1因子は、「運動に対して興味が出ない時がある」や「運動が嫌いだと思う時がある」などの9項目から「運動への興味の低さ」と命名した。第2因子は、「1回で習得ができずに何回もかかる時がある」や「わかっているができない時がある」などの8項目から「自己の能力の低さ」と命名した。第3因子は、「成功体験が周りよりも少ないと思う時がある」や「チームを決める際に最後まで選ばれない時がある」などの8項目から「仲間との比較」と命名した。第4因子は、「教師や指導者から怒られる時がある」や「教師や指導者に強制的に運動をさせられる時がある」などの4項目から「指導者への不信感」と命名した。

ここから、運動場面における「苦手さ」は単体の要因ではなく、これら4つの要因が絡んでいると考えられた。さらに、「苦手さ」の4つの因子は、障害のある子どもやトップアスリートの学生といった、様々な対象であっても当てはめることが可能な、汎用性のあるものではないかと考えられた。

### 2) 運動場面における「苦手さ」の因子構造

重回帰分析の結果、「自己の能力の低さ」と「指導者への不信感」の関係を除いたほとんどの因子間には、有意な影響関係があることが明らかになった。

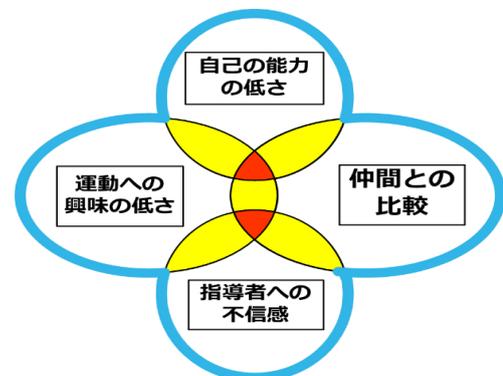
表1 因子間の関連性

従属変数	独立変数(標準化係数β)	
①運動への興味の低さ R <sup>2</sup> =.54**	③仲間との比較	.44**
	④指導者への不信感	.25**
②自己の能力の低さ R <sup>2</sup> =.44**	②自己の能力の低さ	.19**
	③仲間との比較	.49**
③仲間との比較 R <sup>2</sup> =.59**	①運動への興味の低さ	.23**
	②自己の能力の低さ	.39**
④指導者への不信感 R <sup>2</sup> =.34**	④指導者への不信感	.36**
	①運動への興味の低さ	.17**
	③仲間との比較	.36**
	③仲間との比較	.28**

\*\* : p < .01

このことから、ある因子による「苦手さ」を改善することで、他の複数の因子における「苦手さ」を合わせて改善され得ることが考えられた。例として、「運動への興味の低さ」は、「自己の能力の低さ」と「仲間との比較」、「指導者への不信感」という3つの因子との関連があった。ゆえに、「運動への興味の低さ」を感じている生徒の「苦手さ」を改善することで、他の3つの因子における「苦手さ」も改善され得ると考えられた。ただし、「自己の能力の低さ」と「指導者への不信感」の間には、双方向から有意な影響関係がなく、両者間には非連動性が示された。ゆえに、この2つの因子において「苦手さ」を感じている生徒に対しては、異なる指導のアプローチが必要であると考えられた。

以上をもとに、運動場面における「苦手さ」を定義し、サブグループに応じた運動が苦手な生徒に対する適切な指導方法について検討した。



運動場面における「苦手さ」

図1 運動場面における「苦手さ」の因子構造